

第6章

「托鉢旅行」「サーカス巡業」の 成果やいかに

—ゼレンスキーの広島サミット参加は、
バフムート陥落と同時だった



中露が進める「ユーラシア経済圏」

欧米のテクノクラートたちが悲鳴を上げるなか、ヨーロッパを魅了し続ける中国の「一带一路」政策

<https://strategic-culture.org/news/2019/04/20/china-belt-road-continues-win-over-europe-while-technocrats-scream-howl/>

ゼレンスキー大統領は、二〇二三年五月二〇日に広島に到着しました。

その前日五月一九日はウクライナの激戦地アルチョモフスク（別名バフムート）が陥落した日でした。

ウクライナ最大の拠点とされたマリウポリ市アゾフスタル製鉄所が陥落し、次の拠点とされたソレダル市の巨大な地下岩塩採掘場も落とされ、第3の拠点とされたアルチョモフスクでウクライナ軍は凄惨な戦いを強いられていました。

ところがゼレンスキー大統領は「バフムートを死守せよ」と兵士たちに「玉砕」を命じながら、自分はさっさと外遊に出たのでした。他の激戦地と同じく、ここでもウクライナ軍から大量の死傷者が出ていたのですから、それを尻目に外遊に出たことに、彼は痛みを感じなかったのでしょうか。

しかも外遊に出たのは無人機によるクレムリン攻撃の直後でした。ですから、その報復でキエフの大統領官邸がミサイルで爆破される危険性もありました。だから、自分の身が危なくなることを恐れての外遊ではなかったのかという噂も出るくらいでしたから、なお

さらのことでした。

普通感覚では、陥落するのも間近いと言われていたにもかかわらず「何としても死守せよ」「全員玉碎せよ」と命じるほどの激戦地だったのですから、その結末を見るまではウクライナの地を離れるわけにはいかないと考えるのが、最高責任者として大統領のとるべき姿勢だと思われるのですが、彼のとった行動はそれと真逆まぎやくでした。

その上、彼は「バフムートを広島と同じだ」と言いつつも、広島や長崎かかどんを灰燼かいぜんの地とさせたアメリカについては一言の言及もせず、「バフムートを灰にさせた」としてロシアを批判・攻撃するのみでした。

しかし、繰り返しになりますが、マリウポリ市アゾフスタル製鉄所のとすと同じく、ロシア軍は「撤退の通路」を保証していたのですから、バフムートからの撤退を即座に命令していれば、バフムートは灰燼かいぜんの地とはならなかったはずなのです。

2

ところで、ゼレンスキー大統領の「玉碎」を命じる姿勢に、すでにウクライナ軍内部から疑問や批判の声が出ていました。それを報じたのがドイツの日刊紙ビルト(BILD)でした。

以下はその紹介記事です。

* Zelensky at odds with top general - Bild 「ゼレンスキー、自軍の最高司令官と不和。ビルト紙」
<http://mmmethod.blog.fc2.com/blog-entry-1620.html> (翻訳NEWS) 2023/06/06

この記事によれば、キエフ軍の最高司令官ヴァレリー・ザルジニー将軍 (Valery Zaluzhny) が「バフムートを放棄して次の反転大攻勢に備えて撤退すべき」と言っていたにもかかわらず、ゼレンスキー大統領はそれを拒否していたのです。

月曜日のBBC紙の記事では、ゼレンスキー大統領と軍司令官であるヴァレリー・ザルジニー将軍の間で内部対立が起きているとのことである。

キエフの内部関係者がドイツのタブロイド紙BBCに語ったところによると、軍司令官ザルジニー将軍は、数週間前にドンバスの主要都市からの撤退を呼びかけたという。

ザルジニー将軍は、ロシア軍がアルチョモフスク (ウクライナ名ではバフムート) を制圧する恐れがあるから、防衛を続けるよりも放棄するよう大統領に助言したと同紙は報じている。

しかし、ウクライナのゼレンスキー大統領は、同市をウクライナを守るための最後の要衝だとして、軍隊を撤退させることを拒否した。



ヴァレリー・ザルジニー將軍（ウクライナ軍の最高司令官）

バフムートを放棄して次の「反転大攻勢」のために備えるべきだという意見はバイデン大統領からも出されていたのですが、ゼレンスキー大統領は「この拠点を放棄するとウクライナ軍の士気が一気に低下するから」という理由で、これも拒否しています。

有名な『孫子の兵法』『謀攻篇』によれば、文官（国王）が武官（將軍）の指示に従わない戦争は敗北することです。ですから、これではウクライナ軍がロシア軍と戦って勝てるはずはありません。

ところでウクライナ軍内部における確執^{かくしつ}、あるいはキエフ政権にたいする軍部の不満は、次の記事でも明らかにされています。

* Looming Mutiny Among Kiev Regime Forces? 「キエフ政権軍において暴動が起こる危機が迫っている。」
<http://tmmethod.blog.fc2.com/blog-entry-1606.html> (『翻訳NEWS』2023/06/01)

キエフ政権とその軍隊の関係が決して良好でないことは、ほとんどニュースになっていない。

しかし、ここ数カ月、深刻化する対立の拡大と派閥争いはエスカレートし続け危険なレベルにまで達している。今や軍の内部で、ゼレンスキーとその取り巻きに対する深刻な反発が形成されつつある。

以前からウクライナ軍はほとんど機能不全の複合体である。すなわち旧ソ連軍の幹部、より最近の「NATO化」した将校団や特殊部隊、さらに、一定のNATO訓練を受けて公然とネオナチ化したさまざまな部隊の複合体であり、そのうえネオナチ化した部隊は、その戦闘経験のほとんどはドンバス共和国との戦闘のみである。

ご覧のとおり、大手メディアではほとんど報道されたことのないキエフ政権の実状が赤裸々に暴露されています。さらに、ゼレンスキー大統領がウクライナ軍の幹部からどれほど嫌われているかを、この記事は次のように述べています。

ゼレンスキーは旧ソ連軍の幹部たちから(控えめに言って)嫌われているだけでなく、「NATO化」した指揮官たちも同じだ。これにはポロシエンコ前大統領とキャリアが絡むトプクラスの将校たちも入っている。

これらの軍事指導者は、ソ連とNATOの両方の軍事教育を受けたが、それは何十年も続く

3

ここではゼレンスキー大統領が「軍事行動をある種の劇場に仕立て上げ、情報戦を展開することだけを目的として、キエフ軍に無用な大量の犠牲者を出した」と述べられています。つまりNATO諸国から資金や武器をもらうために、見栄えのする派手な立ち回りをす

労力と時間のかかるプロセスであった。そのため、GUR（ウクライナ国防省情報総局）のキリロ・ブダノフ長官のようなゼレンスキーの取り巻きが突然台頭たいとうしてきたことに失望し、嫌悪感すら抱いている。（中略）

一方、ゼレンスキーは、軍内ではほとんど疑いの余地のない権威を持つ最高司令官ヴァレリー・ザルジニー將軍に、あからさまに侮蔑された状態で扱われている。

政権トップが、明確に定義された軍事計画がないにもかかわらず、ある種の軍事指導者として自らを押し出したために、軍のエリートたちのほとんどが反対するようになったのだ。

これには、前述の多様なグループのほぼすべてが含まれるが、特に、ゼレンスキーを英雄視する宣伝文句に嫌悪感を抱くネオナチ部隊は多い。

これは、ゼレンスキーが軍事行動をある種の劇場に仕立て上げ、情報戦を展開することだけを目的として、キエフ軍に無用な大量の犠牲者を出したという事実を端を発している。

る戦闘を軍に強要していることが軍幹部の反感を招いている、と言っているわけです。その典型例がアルチョモフスク（別名バフムート）の戦いだ、この記事は述べています。

バフムートはその最たる例である（いや、最悪の例かもしれない）。

ザルジニーの再三の撤退要請にもかかわらず、ゼレンスキーがその防衛を主張したのは、この都市を失うことで欧米の支援や資金繰りが悪化することを恐れたからだ。

このような軍事的に不健全な判断が、ネオナチ軍団の悲惨な死亡率につながった。

この点に関する情報源は非常に多様であるが、最も確かな見積もりとしては、これまでに約25万人のウクライナ兵が死傷した。

一方、二月のトルコの報道（イスラエルの情報機関の引用）では、取り返しのつかない損失が40万人近くに達し、そのうち約16万人が戦死、残りは重傷であると詳細に報じられている。

これは二月の時点での死傷者数ですから、五月一九日にアルチョモフスク（別名バフムート）が完全に陥落した時点では、この数字は遙かに大きなものになっているはずですよ。

ところがゼレンスキー大統領は、このような凄惨な光景が展開されているバフムートの兵士を見捨てて、自分は豪勢な外遊に出かけたのでした。

各国首脳はゼレンスキーを国賓として迎えたでしょうから、彼は各国で美味大食を楽しんではずです。NHKの報道でも、ホテルの料理長は「最高級の料理を出した」と語っていました。

ところが、その一方でゼレンスキー大統領は、ロシア軍によって壊滅状態になったバフムートに「原爆で灰燼の地となった広島と同じだ」と悲しんで見せたのでした。

ロシアのワグナー軍団は、バフムートをほぼ完全に包囲した時点で、「撤退を希望するものはここから逃げろ」と撤退する通路を1箇所だけ保証していたのですから、そのときゼレンスキーが撤退を許可していれば、ロシア軍とワグナー軍団は灰燼に帰すほどの攻撃をバフムートに加える必要もなかったのです。

バフムートが灰燼に帰すほどの状態になったのは、まるでロシア軍・ワグナー軍団の残忍な攻撃の所為だと言わんばかりの口調ですが、そのような状態に追い込んだのは、他ならぬゼレンスキー自身だったのです。

4

アルチョモフスク(別名バフムート)で、ウクライナ軍兵士がどれだけ凄惨な状態に追い込ま

れたのかを示す記事が、つい最近のWSJ紙(2023/05/25)に載りました。

* Ukraine sent untrained conscripts into Donbass 'meat grinder' - WSJ

「ウクライナは訓練を施していない徴兵を「肉挽き場」と化しているドンバスに派遣(ウォールストリートジャーナル)」
<http://unmethod.blog.fc2.com/blog-entry-1607.html> (翻訳NEWS] 2023/06/01)

この記事はその状況を次のように述べています。

木曜日の記事で、米国メディアWSJ紙(ウォールストリートジャーナル)は、二月にロシアのドネツク人民共和国のアルチョモフスクで戦闘中だった16人のウクライナ兵の物語を伝えた。問題の部隊は「ほとんどが貧乏人」で、その多くが失業していた。数十年前に兵役を終えた者もいたが、実際の戦闘を経験した者はほとんどいなかったという。

WSJ紙によると、彼らは基地で2泊しただけで、ソ連時代のライフルと制服を渡された。その後、彼らはアルチョモフスクに配備されることを告げられた。

アルチョモフスクは、ロシア軍とウクライナ軍が数カ月にわたってにらみ合い、「肉弾戦」[21世紀最大の戦闘]と評される舞台である。

中には、「訓練を受けていない」という理由で命令に従うことを拒否しようとする兵士もいた。ある者は、「銃を持ったことがないので怖い」と訴えたが、ウクライナの少佐は「バフムートが教えてくれるさ」と言ったただけだったと振り返る。

御覽のとおり、徴集された兵士のほとんどが「貧乏人」で「その多くが失業していた」のです。しかも「数十年前に兵役を終えた者もいたが、実際の戦闘を経験した者はほとんどいなかった」というのです。

彼らは基地で2泊しただけでソ連時代の古いライフルと制服を渡され、バフムートに配備されたのです。つまり全く戦闘訓練なしで激戦地に放り込まれたのです。

なかには「訓練を受けていないから」と命令に従うことを拒否する兵士もいたし、「銃を持ったことがないので怖い」と訴えてもウクライナの少佐は「バフムートが教えてくれる」と言っただけだったというのですから、まったく呆れてしまいます。

これが、ゼレンスキー大統領が「ウクライナ最大の要衝だから断固、死守せよ」というバフムートの実態でした。

5

さて、この記事は、生存兵や殺された新兵の親族の話をもとに、激戦地に放り込まれた兵士のその後を次のように解説しています。

このウクライナ第93機械化旅団の第5中隊に入隊した16人の徴集兵は、アルチョモフスクで36時間（1日半）戦っただけで、11人が死亡または捕虜になった。

部隊の一人は、生まれて初めてアルチョモフスクでロケット弾を発射したと同誌に語り、もう一人はロシア軍の攻撃を「この世の地獄」と表現している。

キエフ政権が、アルチョモフスクで戦わせるために「徴集兵や領土防衛部隊」を派遣していたこと、そのうえ訓練も装備もバラバラなものだったことを、WSJ紙は指摘していた。

それは、「春に始まると広く予想されていた攻勢に備えて、西側の訓練を受け装備の充実した旅団を前戦に送らないため」だという。

このような貧弱な部隊を、「最大の要衝だから死守せよ、玉砕しろ」と命じて、「この世の地獄」と呼ばれる激戦地に送り込むゼレンスキーの神経が、私には信じられません。

しかも、そのような貧弱な部隊をバフムートに送り込んだのは、「春に始まると広く予想されていた攻勢に備えて西側の訓練を受け装備の充実した旅団を前戦に送らないため」だということですから、ますます呆れてしまいます。

なぜならウクライナ軍最高司令官ザルジニー将軍がバフムートからの撤退を主張してい

たのは、まさに「春の反転大攻勢に備えるため」だったからです。いったん撤退して体制を立てなおすべきだ、というのがザルジニー將軍の主張でした。

もし逆にバフムートは死守しなければならぬほどの重要な要衝だったのであれば、そこにこそ「西側で訓練や装備を受けた」優秀な旅団を送り込むべきで、WSJ紙が報じたような貧弱な部隊であってはならなかったはずです。

つまり、ゼレンスキーの主張は支離滅裂なのです。これでは軍幹部から批判の声が吹き出るのも当然でしょう。先述の記事が「キエフ政権軍において暴動が起こる危機が迫っている？」という題名になっていたことの原因が、これで分かります。

* Looming Mutiny Among Kiev Regime Forces? 「キエフ政権軍において暴動が起こる危機が迫っているのか？」
<http://mmmethod.blog.fc2.com/blog-entry-1606.html> (『翻訳NEWS』2023/06/01)

6

ところが、上の記事はもうひとつ不吉な情報を伝えていました。それはゼレンスキー非難の急先鋒であり、次に大統領選挙があれば必ず当選するであろうと噂が高かったザルジニー將軍が、とつぜん公の場から姿を消したことです。

この記事はその事情を次のように説明していました。

ゼレンスキーは、自分の行動がウクライナ人、特に約10年間NATOの訓練を受けてきた軍隊にどれほど不評であるか、そして好戦的なNATOすらできなかった方法（制空権の欠如）で隣の軍事大国ロシアと戦争することに行き詰まっていることを完全に理解しているはずである。四月一三日以来、公の場に姿を現していないザルジニーの奇妙な失踪は、おそらくこうしたことから説明できるだろう。ザルジニー將軍は逮捕され、將軍の支持者から隔離されたとする説もあれば、ザルジニー將軍は殺されたとする説もあり、彼の運命については多くの情報筋から推測するしかない。

真実がどうであれ、キエフ政権内の分裂の拡大はエスカレートしていくに違いない。

つまり、この記事はザルジニー將軍はゼレンスキーによって「消された」可能性^があることを示唆しています。

チャップリンの映画『独裁者』に、「ヒトラー暗殺」を企ててその実行者を誰にするかをコインで決めようとする場面がありますが、実際ドイツ軍の内部でもヒトラー暗殺の計画^ががありました。暗殺実行者には貴族出身のクラウス・フォン・シュタウフェンベルク大佐^が

選ばれましたが、暗殺は失敗しました。

同じことがキエフ政権も起きる可能性があり、その機先を制しての、ザルジニー將軍の逮捕または暗殺ではなかったのか、というわけです。

「真実がどうであれ、キエフ政権内の分裂の拡大はエスカレートしていくに違いない」という記事の結びが意味深長です。

7

この記事の最後は「真実がどうであれ、キエフ政権内の分裂の拡大はエスカレートしていくに違いない」と結ばれていましたが、政権内部の分裂あるいはゼレンスキー暗殺の危機は強まることはあっても弱まることはないでしょう。

というのは、ゼレンスキーが広島に着いた前日一九日に「アルチョモフスク（別名バフムト）の陥落」のニュースが報じられましたが、これをゼレンスキーは認めようとはしませんでした。その一方でゼレンスキーは「戒厳令が続くかぎり総選挙はしない。それは憲法が認めていることだ」とも言っています。

とすると、この戦争を続けるかぎり、「野党を一切禁止し、政権を批判するメディアを

弾圧する」ゼレンスキー独裁政権は、半永久的に安泰を謳歌することができません。

そのためには戦争を維持するためのお金と武器を他国に訴え続けなければなりません。海外への遊説はそのための「托鉢」旅行だったとも言えるわけです。

それは、別の言い方をすれば、「俺はおまえたち欧米の主張する『正義と民主主義』を守るための自己犠牲的戦いをやっているのだから、金と武器をよこすのは当然だろう」という、一種の「ゆすり」「たかり」にもなるわけです。

しかし、ゼレンスキーにとって困ったことは、彼個人と彼の政権の腐敗ぶりですが、ますます明らかになりつつあることです。たとえば調査記者として名声の高いシーモア・ハーシユは、インタビュ番組で次のように、「ゼレンスキーが米国のウクライナ支援から4億ドルを横領した」という「爆弾」発言をしています。

* Seymour Hersh on his BOMBSHELL report of Zelensky embezzling \$400 million from US aid to Ukraine
「シーモア・ハーシユの爆弾報告：ゼレンスキーが、米からウクライナへの支援金4億ドルを横領」
<http://mmmethod.blog.fc2.com/blog-entry-1494.html> (『翻訳NEWS』2023/05/06)

これは「ロシアの天然ガスを輸送する海底パイプライン破壊にはアメリカも関わっていない」という暴露記事に続く、第2弾のヒット商品かも知れません。というのは今まで欧米

の大手メディアはゼレンスキーを英雄視する以外の記事を書いたことがないからです。このインタビュー番組でハーシユ記者は次のような事実を明らかにしています。

- ・ウクライナのゼレンスキー大統領とその側近が、燃料やディーゼルエンジンの購入のために割り当てられた米国の支援金から4億ドルを横領していたこと
- ・CIAがこの汚職を把握していたこと
- ・ゼレンスキーがCIA長官ウィリアム・バーンズにこの汚職を叱責され、数十人の将官や役人の解雇につながったとされること
- ・海底パイプライン「ノルドストリーム」の爆破犯人について、ハーシユがその情報源を明らかにしないことへの、主流メディアによる攻撃 その他

このインタビューによると、ハーシユ記者は、自分が書いた「ロシアの海底パイプライン破壊にはアメリカも関わっている」という爆弾記事の、その情報源を明らかにしろ、と大手メディアから攻撃されているようです。

が、これはまさに大手メディアの自殺行為と言うべきものです。なぜなら記者は情報を

提供してくれた人物に対する「守秘義務」があるからです。そのような情報源を明らかにしたら今後は「特ダネ」記事などありえないことになるからです。今や大手メディアは政府の御用機関に墮落してしまったことの証左とも言えます。

8

それはともかく、ゼレンスキーとその側近の墮落ぶりを示す記事を、もうひとつだけあげます。それは先述の「キエフ政権への軍による反乱の危機？」と題する記事の中に次のような事実が書かれていたからです。

この間、ゼレンスキーは国外に巨額の富を蓄え、彼の家族の贅沢なライフスタイルは、何百万人も一般ウクライナ人の悪化した生活環境とは対照的である。

このことは、国会議長のルスラン・ステファアンチュク（家族をポーランドに移住）や、国家安



シーモア・ハーシュ（元ニューヨークタイムズ紙の記者）

全保障・防衛会議議長のオレクシイ・ダニロフ(息子のマキシムは徴兵を免れマイアミに逃亡)など、ゼレンスキーの仲間と酷似している。

外国に逃げ出すことが出来なかった一般庶民は、街頭で徴兵されて、バフムートその他の激戦地に送られ、その多くが死傷者になっているのに反して、この政権幹部の腐敗ぶりには眼をおおいたくなるものがあります。

その腐敗の頂点が、最高裁長官の「300万ドルの賄賂で逮捕」という事件だったかも知れません。この記事では「他の裁判官もこの計画に関与している可能性があることを示唆している」と報じていました。

* Chair of Ukrainian Supreme Court arrested over \$3 million bribe

「ウクライナ最高裁長官、300万ドルの賄賂で逮捕」
<http://ummethod.blog.fc2.com/blog-entry-162.html> (『翻訳NEWS』2023/06/06)

また次の記事では、ゼレンスキーがクリミアに所有していた「高層の超豪華マンション」が、ロシアの国有物として差し押さえられたと報じていました。

* Zelensky's penthouse seized in Crimea 「ゼレンスキーがクリミアに所有していた高級別荘が差し押さえられる」

ゼレンスキーが「クリミアを取りもどす」と言っていたのは、このような自分の資産を取りもどしたかったのかも知れません。なにしろ、この記事によれば、ゼレンスキー大統領の妻ゼレンスカヤがリゾート都市ヤルタ近くに所有するこのペントハウスは、80万ドルの価値があると推定されているそうですから。

9

さて以上のような理由で「托鉢^{なまは}」旅行に出たゼレンスキーですが、その成果はあったのでしょうか。

ウクライナにいれば、クレムリンを無人機攻撃したわけですから今度は自分が住んでいる大統領官邸が攻撃される恐れがあります。また軍内部からの反乱や暗殺の危険もあります。もしザルジニー將軍がゼレンスキーによって「消された」のが事実だとすれば、その危険の方が大きいかも知れません。

もちろん、かつてロシア軍が「特別作戦乙」を開始したときのように地下壕生活に入る



ゼレンスキー大統領夫妻がクリミアに所有していた超豪華なマンション

道もあるわけですが、そのような暗い生活は御免被^{ごめん}りたいのが本音でしょう。それを避けるためには外遊するのが一番です。暗殺される心配がないどころか美食大食の美味しい生活が待っています。

ですから「托鉢^{たくはつ}」旅行に出かけた第一の成果は「安心かつ美味しい生活」だったことは間違いありません。しかし肝心の「托鉢」のなかみはどうだったのでしょうか。

中東訪問では大国サウジアラビアからの支援・支持を得ることが大きな目的でしたが、かつてアメリカの親友だったサウジは今ロシアとの協力関係を重視し始めていますから、ロシアへの経済制裁もウクライナへの財政支援・武器送付も得ることができま

せんでした。次の記事はサウジの姿勢をよく示しています。

* Saudi Arabia refuses to change stance on Ukraine conflict

「サウジアラビアはウクライナの紛争に対する立場を変えないと表明」

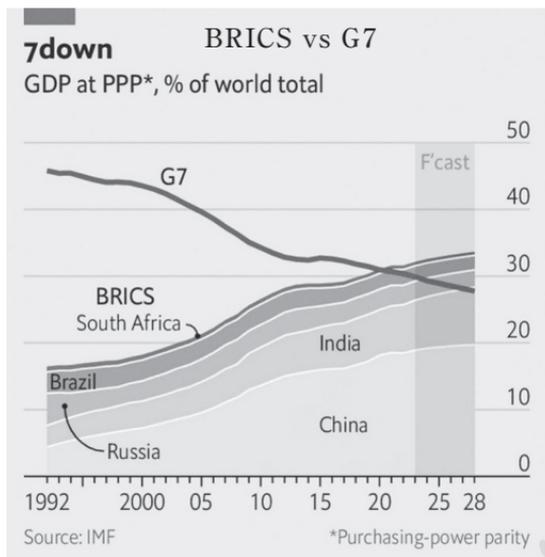
<http://tmmethodblog.fc2.com/blog-entry-1610.html> (翻訳NEWS]2023/06/02)

10

そこでゼレンスキーは、日本に來れば、アジアの大国インドのモディ首相と南米の大国ブラジルのルーラ大統領と直接に對話できるのでから、当初は「ビデオ出演」だけの予定だったG7の会議に行かないわけにはいかないと考えたのでしよう。そこで出席の許可をもらっての電撃的な広島訪問でした。

しかしモディ首相は、ロシアのウクライナ進攻については「中立政策」を維持したままでしたから、ゼレンスキーの「鉢」には何も入らなかったようです。インドにとつてはG7の一員であるよりはBRICSの一員である方が、はるかに将来性があると考えたに違いありません。

これはルーラ大統領にとつても同じだったでしょう。確かにルーラ大統領はロシアの「特別作戦Z」を非難しましたが、かといってロシアへの経済制裁にも、ウクライナへの財政



<https://kamoogawakosuke.info/2023/05/29/no-1810-BRICS-vs-g7/>

支援・武器送付にも、加担しませんでした。それよりもBRICSが進める経済政策がはるかに魅力的だからです。

左の図表を見れば分かるように、BRICS創設メンバー5か国だけで、その経済規模はG7の7か国を大きく上回っています。もはやG7という旧帝国主義者が発展途上国を支配できない、多極化世界に突入しているのです。ルーラ大統領がゼレンスキーの口車に

乗らなかつたのは当然のことでした。

ところが岸田政権は、この現実を認識できず、G7のうち6つは欧米諸国なのに、只ひとつ日本だけがアジアの国だということに気がついていないようです。

中国とロシアが中心になって進めているユーラシア経済圏に入れば、ロシアや中国から企業を撤退させる必要もないのですから、G7の仲間であるよりも遙かに大きな経済的利益を得ることができるはず。イランや

サウジアラビアまでもがBRICSに加盟したいという意向すら示しているのですから。

11

ところが日本だけは、岸田首相が、自らキエフを訪問したり、今度のゼレンスキー来日に併せて、「ウクライナへ陸上自衛隊の車両を100台規模で提供する」という大盤振舞おおばんぶるまいまでおこなうという始末でした。

ゼレンスキー大統領への軍内部からの不満が高まっていて内乱の危険すらあると言われるときに、岸田政権のこの倒錯ぶりには困ったものです。EU諸国の首脳は相変わらずロシアへの経済制裁とウクライナへの財政支援・武器送付に乗り気ですが、民衆の気持ちは既にウクライナから離れてしまっていますから。それを端的に示すものが次の記事でした。

* Kiev demands apology after 'cynical' skit broadcast

「ウクライナ当局は、『皮肉な』番組が放送されたことを受けて謝罪を要求」

<http://tmmethod.blog.fc2.com/blog-entry-1609.html> (『翻訳NEWS』2023/06/02)

これはフランスの風刺番組の司会者がゲラゲラ笑い転げながら、ウクライナのゼレンスキー大統領のヨーロッパツアーを「サーカス巡業のようなもの」と表現したことに、キエ

フが抗議したことを紹介する記事でした。

私はゼレンスキーの外遊を「托鉢」旅行と表現したのですが、フランス民衆の眼にとってはそれが「サーカス巡業」と映ったということなのです。

ウクライナに財政支援・武器送付をすればするほど、戦いは長引き死傷者が増えていきます。ですから、ウクライナ紛争を一刻も早くやめさせるには、財政支援・武器送付をやめることです。そうすれば停戦・和平交渉は明日にでも実現できます。

ところが日本の左翼・リベラルですら、ロシア＝侵略者という図式から解放されていないので、ますます戦いは長引き死傷者が増えていきます。しかし、ゼレンスキーにとってもアメリカにとっても、これは好都合な事態です。

なぜなら、戦争が長引く限り「戒厳令」「非常事態」を口実に、ゼレンスキーは独裁政権を維持できますし、アメリカは戦争を長引かせて、それがロシアの弱体化につながることであれば大成功だからです。アメリカにとってはウクライナ人がどれだけ死のうが、ウクライナがどれだけ荒廃しようが、知ったことではないからです。軍需産業も大儲かりです。

私は、ブラジルのルーラ大統領がロシアの「特別作戦Z」を「侵略行為」として非難したとき、南アのマンデラ氏のことを思い出しました。というのは、牢獄から解放されて選挙で大統領になったとき共産主義者だったはずの氏が、新自由主義の経済政策を全面的に受け入れ、白人の資産や経済運営に全く手をつける気がないことに驚かされたからです。

しかもマンデラ氏は大統領になったあとは獄中生活をあれだけ献身的に支えてきたウイニー夫人と離婚し、モザンビーク初代大統領サモラ・マシエルの未亡人グラサ・マシエルと再婚しました。私にとっては、これも長い間の謎でした。

しかし、ウイニー夫人が新自由主義の経済政策に強く反対していたための離婚ではなかったのかという仮説が思い浮かび、やっと謎が解けたように思ったのです。

逆に言えば、マンデラ氏が牢獄から解放されて大統領になるにあたっては、獄中にいるとき当時の白人政権から「ゆさぶり」があつて、白人の経済支配には手をつけないう密約があつたからこそその釈放ではなかったのかという仮説です。さもないと、「マンデラ氏が大統領になったにもかかわらず南アの黒人が貧困から解放されなかった理由」が説明



できないからです。

同じことはブラジルのルーラ大統領についても言えそうです。

ルーラ大統領も濡れ衣を着せられて長い間の獄中生活に耐えなければなりませんでした。しかし、やっと監獄から解放されて再び大統領選挙に立候補することができ、めでたく当選したとき、その政策は獄につながれる前の政策とは大きく様変わりしていました。

その端的な現れが、かつての社会主義的政策の放棄とロシアにたいする「侵略」非難でした。だからルーラ氏についても、マンデラ氏と同じように、獄中にいるときの密約が氏への釈放となり、大統領への当選につながったのではないかと推測したのです。

もちろん、これはあくまで私の

仮説ですが、そのルーラ大統領がゼレンスキーからの「ゆさぶり」にも負けず、広島でのG7サミットでBRICS優先の立場を堅持したことに安堵の胸をなでおろしました。

〈追記〉

先には「ザルジニ將軍の姿が最近、公の場に登場しない。ひょっとしてゼレンスキーに消された可能性がある」と書きましたが、つい先日、彼の名前がニュースに出てきました。ゼレンスキーの未来が危うくなってきたので、再登場の機会が与えられたのかも知れません。

〈本章のキーワード〉

ユーラシア経済圏「一帯一路」

ヴァレリー・ザルジニ將軍 (Valery Zaluzhny, ウクライナ軍の最高司令官)

クラウス・フォン・シュタウフェンベルク大佐 (ヒトラー暗殺の実行、失敗)

シーモア・ハーシュ (Seymour Hersh, 元ニューヨークタイムズ紙の記者)

ウクライナ軍の拠点：アルチョモフスク (Artyomovsk：別名バフムートBakhmut)